Black MeSH と共に始まった医学図書館員

河 島 裕 子*

Kawashima H. (5-6-16-103, Shinkawa, Mitaka-shi, Tokyo 181, Japan) : Medical Librarian with Black MeSH. *Igaku Toshokan* 1996 ; 43(3) : 330-333.

The first edition of Black MeSH was published in 1960 as Part 2 of Index Medicus-New Series, Vol. 1, No.1. The publishing of Black MeSH was very exciting for medical librarians including Japanese medical librarians. To learn medical terms in our own language and MeSH terms was important the period when reference search was by manual. The improvement of MeSH headings and subheadings was continued, there were 4,413 main headings in the first edition and 14,882 in the 1995 edition. The bibliographic search was changed from manual to computer search, and searchers changed from librarians to library users. But a specialist as a medical librarian must be a specialist who well understands MeSH terms though the medical bibliography was changed to multimedia.

Index Medicus-New Series は1960年から発行されました。私が癌研究会図書室（東京都豊島区）に就職した翌年のことでありまして、私はUDCの616（医学）と615（薬学）の分類と医学用語の習得に一生懸命のころのことです。まだIndex MedicusのMeSHも読めないころのことですが、医学図書館協会会員の諸先輩がIndex MedicusとMeSH（Index Medicus, No.1 Part 2＝通称Black MeSH）の発行と到着について興奮気味に話していたことを思い出します。当時の癌研究会の図書室は研究所の中央に位置し、研究所のセミナーは図書室で行われ、世界の研究の傾向や研究者のテーマと図書館資料・サービスとの関連が近かった。研究者への図書館サービスとしては雑誌の到着案内・コンテンツサービス・雑誌回覧等種々ありますが、それぞれ研究者の要望に応じて行っ

ていました。医学用語の習得が緊急要務であり、病理学＝がんの感覚で病理学とがんの知識の習得という受験勉強のような日々でした。日本語医学用語とMeSHの理解、特にCategoryとTree的な理解が進むと、文献検索サービスができるようになります。当時の文献検索は図書館員にとっても、研究者にとっても大変に手間のかかる仕事でした。Index Medicusはありましたが当時は複写機器も存在しない時代ですから、そのMeSH項目の論文全部をカードに書き写すこともできず、該当するMain HeadingsとMain-Subheadingsの下の論文標題を読みながら、選択し、研究者の必要とするであろう文献をレファレンスカードに著者・論題・雑誌名・ページ・年と正確に書き写すという忍耐のいる仕事でした。まことに文献の検索は手間と時間がかかりました。しかし、書き写す間に、どのような名前の研究者がこの研究を続けているのか、どのような観点からこの病気を研究しているのか、などを知ることができます。そしてどのような論文がどのような深さでインデッ

*Hiroko KAWASHIMA : 〒181 東京都三鷹市新川
5-6-16-103.

（1996年7月19日 受理）

クスされるのかなどがわかってきます。文献検索するごとに自分の医学知識が少しずつふくらんでゆくのは、大変にうれしいことであり、ありがたいことでした。検索を重ねるごとに、的確性が増してゆけば、研究者の信頼度も増しますから、検索依頼も増すということになります。研究者の博士論文のための文献検索と文献収集を重ねたことが大変勉強になりました。博士論文は歴史的な文献から最新文献まで網羅的に集めるからです。勉強にはなりましたが、あの小さな文字を読み書きするのですから、近眼が強くなりました。世界中の医学図書館のレファレンサーは眼鏡をかけているに違いないと想像していました。

MeSH は米国国立医学図書館の所蔵本の検索カードの件名標目としても使われてきましたから、長年、件名目録を作成してきた図書館員にとっても基本資料です。また、雑誌の特集記事の目録の作成にも用いられ、医学用語のよき学習課程でもあったと思います。このように MeSH は医学図書館員にとり医学用語の理解に基本的なツールでした。となれば、いかに MeSH を有効に使いこなすかが、医学図書館員にとっては重要課題です。関連分野カテゴリーの和訳と、Anatomy, Neoplasms の Tree Structure の和訳は必須でありました。医学図書館員にとって、目録のとりかたに労力を費やすよりも MeSH の理解に労力を費やすべきではないかと考えて、目録の簡略化の要約文を投稿したこともありました。そのくらい MeSH は必需品であり、重要に考えていました。

次に転職した国立がんセンター図書館（東京都中央区）は、本の分類には NLMC を使い、件名目録を作成することになっても、MeSH の訳本はなく、Topical Subheadings の使い方のテキストもありません。早速 Topical Subheadings の使い方について、訳を試み「医学図書館」に投稿しました。どうして全国の医学図書館員が苦勞しなければならないのか不思議に思っていたが、そ

の後まもなく日本医学図書館協会から松村多美子氏の「Index Medicus の使い方」が出版されました。国内の医学図書館員の MeSH の使い方のよりどころがやっとできたのでした。慶應義塾大学北里医学図書館（慶應義塾大学医学メディアセンター）では NLM のために国内の雑誌論文の索引付けに Indexing Manual を使用していることを聞き知り、NLM に依頼して Indexing Manual を入手し、がんに関連する項目の検索方針を自分用に和訳しました。

このように MeSH を理解することが医学図書館員という専門家としての基本であり、また目標でもありました。

その後、複写機トーコーブとかゼロックスという便利なものが普及すると、文献検索は MeSH Subheadings の項目のページを複写し、必要と思われる論文に印をつけて研究者に渡し、原文献の必要なものに印がついて戻ってくると、文献カードを作成して原文献に付けて研究者に渡すことになりました。関連項目の複写を渡し、自分で読み通す研究者もいます。こういう場合には MeSH-Subheadings の選択に誤りや不足があると大変なことになります。最新文献を知るだけの場合はまだよいのですが、文献を網羅したいときには問題があります。

やがて、機械検索 MEDLARS が発展し、JICST（特定回線オンライン）で文献検索ができるようになりますが、オペレータは図書館員ですから MeSH の知識が要求されます。キーワードも Major とか Minor とか、なにしろ秒単位で使用量により料金を支払うのですから、真剣でした。より正確な検索のためには、毎年増加・削減・変更する Headings を追いかけて、理解を深めました。医学研究と分野を越えた応用科学技術の発展に対応する MeSH の変更・発展は多く、MeSH の維持・改訂の関係者の努力に敬意の念を覚えま

表 1. MeSH 標目の変遷

巻(年)	総標目数	新標目数	削除標目数	件名副標目数	備 考
1(1960)	4,413			66(67)	MeSH 1版 本の目録用副標目 形式副標目=22 地域副標目(国名・州名・市名等) 言語副標目 時代副標目=9
4(1963)	5,700	+1,400	-114	(67)	MeSH 2版 MEDLARS用のみチェックタグ付 本の目録用の形式副標目=24
5(1964)		+91	-12	(67)	MeSH 3版 MEDLARSによるCIMの発行 新標目及び削除標目(カテゴリ-付)を毎年掲載
6(1965)		+579	-46	(67)	歯科標目の追加 MeSH 以後毎年発行
7(1966)		+458	-125	42	カテゴリーリストにはsubcategoryまでを記載 本の目録用の形式副標目=25 以後CIMにMeSHを掲載
8(1967)		+254	-56	53	
9(1968)		+675	-91	60	
10(1969)		+87	-7	60	
11(1970)		+162	-6	60	
12(1971)	7,800	+64	-4	60	
13(1972)		+307	-8	60	
14(1973)	8,500	+577	-23	60	Permuted MeSH 発行
15(1974)		+479	-15	60	
16(1975)	9,300	+368	-76	68	カテゴリーリストはtree structureとなる 新標目及び削除標目にsubcategory numberなし
17(1976)		+149	-42	68	
18(1977)		+248	-57	68	
19(1978)		+382	-87	68	
20(1979)		+249	-72	75	
21(1980)		+309	-109	76	本と視聴覚資料の目録用 形式副標目=111 地域副標目=322 言語副標目=76
22(1981)		+186	-114	76	
23(1982)		+113	-65	76	
24(1983)		+98	-47	76	
25(1984)		+177	-48	76	
26(1985)		+132	-54	76	
27(1986)		+207	-127	76	
28(1987)		+332	-37	76	
29(1988)		+193	-3	77	
30(1989)		+345	-24	77	
31(1990)		+483	-7	77	
32(1991)		+403	-9	80	
33(1992)		+697	-45	80	
34(1993)		+483	-53	80	
35(1994)		+960	-44	80	
36(1995)		+491	-71	82	本と視聴覚資料の目録用 形式副標目=233 地域副標目=366 言語副標目=104
1961-1995		+12,138	-1,698		
1995	14,822				

してみました。1960年に4,413標目で始まり、1995年までの追加は12,138標目、削除は1,698標目、1995年は14,822標目です。標目の変化を理解するには、昨今は変更も多く、新標目にカテゴリーの記載もないので、ニュースの解説文を読む必要があります。その後、通信回線が開放されDIALOG直通になっても使用料の従量制は変わらず、正確さと速さが必要でした。Permuted MeSHやAnnotated MeSHが発行され有用な参考資料となりました。MeSHの日本語訳は日本医学図書館協会からカテゴリー版(1978)、英和・和英(1989, 1991 継続)が発行され医学図書館員には大変喜ばしいことでありました。

やがてMEDLINE CD-ROM版の時代になり、多くの図書館において検索者は図書館員から利用者自身に移行しました。さらにLANの設備充実にともない移行は加速されました。機器と通信技術の発展にともない、学術情報センターから目録情報を取得できるようになっても、所蔵目録と特集記事の件名付与等がまだ残っていますが、MeSHを使用する機会は減っています。

各施設のLAN設備が充実しても、図書館が文献資料の拠点であり続けるならば、研究者であれ、医師であれ、コメディカルであれ図書館を訪れて文献検索する人が必ずいます。検索方法を知らない利用者もいるであろうし、関連項目に留意し正確な検索をする利用者は少ない。

機器の発展・設備の向上により、利用者への機器の使い方のガイドも必要ですが、より正確性を期する検索をガイドできることが一般図書館員と医学専門の図書館員との違いであると思います。MeSHの理解と習得は手作業に比べて、機械化の進歩に反比例して困難になっていくと思われますが、医学図書館員にとって重要な要件であることは変わりません。機械検索がいかにインテリジェ

ントになっても、メディアが変化しても、利用者が原情報を必要とする限り、医学情報を扱う専門員としては、MeSHの理解と新標目の理解は基本であり、その重要性は変わらないと思います。

このたびは、執筆の機会を与えていただきました。ありがとうございます。私は最近医学図書館員ではなくなったのですが、この医学図書館の世界に入ってから、医学用語の習得に努力し、日本の医学界の用語の問題が重要であると思いました。1975年に日本医学会医学用語委員会編「医学用語辞典」が発行されましたが、その序文を読み、企画編集が1940年に始められ、35年間を要したことを知りました。医学界の用語の難しさを知るとともに、この辞典の発行を大変うれしく思いました。この辞典により、初めて医師ではない図書館員が医学用語を取り扱うことができる基本資料が生まれたからです。医学情報が共有化されるためには、用語の統制が必要です。カルテの電子化以前に用語問題であると思います。いかにコンピュータのインテリジェント化が進むとしても用語の統制は必要であるはずですから、世界の医学統制用語であるMeSHは日本の医学界で、いずれ基本の役割を担うようになるような予感がしています。それ故、MeSHを長年使用してきた医学図書館員が医学界から期待されるものがあると思います。

MeSHの調査にあたり、杏林大学医学図書館、東京医科大学図書館、順天堂大学図書館にお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

私は医学の図書館員として30有余年を過ごし退職いたしました。その長期にわたり、大学図書館員、病院・施設等の医療機関の図書館員など多くの方々にお世話になりましたことに心から感謝いたします。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。